

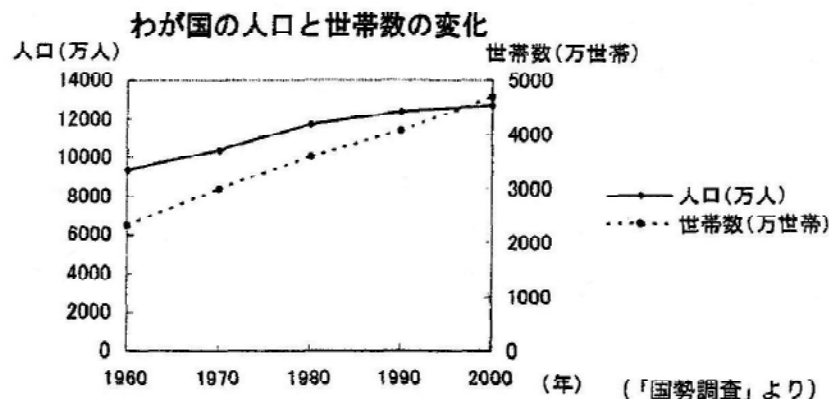
岡山県立岡山操山高等学校

適性検査Ⅱ (50分)

家族のあり方が、近年さまざまなかたちで問い直されるようになってきました。

ここでは、その家族に関する問題 ①・② について考えてみよう。

- ① 次のグラフ「わが国の人口と*世帯数の変化」を見て、1960年から2000年の間に、日本における家族はどのように変化したかを読み取りなさい。また、その変化によってどのような問題が家族・家庭内に生じてきたかを考え、合わせて記述しなさい。



(注) *世帯 住居および生計をともしする者の集団。通常、家族が中心となるが、一人暮らしでも独立した生計を営んでいれば世帯となる。

- ② 次のA・Bを読んで、問1～問4に答えなさい。

A 次の文章は、カウンセリングを担当する筆者が親子の関係について述べたものです。

かつて思春期にある若者にとっては、親は乗り越えるべき怪物、強敵のような存在だった。それまでは何気なく聞いていた「顔洗ったの?」「もっと牛乳飲みなさい」といった指示や言いつけが、やっと出てきた自分らしさの芽を摘み取るハサミのように恐ろしく思えてくる。そして、「どうでもいいじゃない、私の勝手でしょ」「牛乳なんて絶対飲まないからな」とつい声を荒げて、「怪物のハサミ」から自我の芽を守ろうとする。親としては、子どもによかれと思って声をかけているのに、なぜそれほど反抗されるかわからない。「それが親に対する口のきき方なの? 黙って早く顔を洗ってきなさい!」と言い返し、いわゆる「切った張った」の親子ゲンカになってしまうことも少なくない。

ところが今の若者の多くは、そういう激烈な思春期の親子ゲンカの時期を体験していない。親も「〇〇しなさい」と口うるさく命じることもないし、たとえ言われたとしても、子どもの側もあらがうことなく素直に「そうだね」と従う。より友好的な方向への変化が、親にも子にも起きているようだ。その関係を指して、一卵性親子とか友だち親子と呼ぶこともある。

もちろん、怒鳴り合う親子よりは、いつも穏やかにすごす親子の方が好ましいようにも思える。しかし、そういった友だち親子の子どもの側が、ある年代になって思わぬ心の問題に直面することもある。以前、カウンセリングを担当していた二十代の女性は、両親との間で目立ったゲンカをしたこともなく、大学を出て専門職についた。ところが、数年してから不安感や「これでいいの?」という*不安全感が高まり、生活にも支障が出てくるほどになった。彼女は言っていた。「私と両親はなんでも話し合えることができるので、とても恵まれていると思います」。ただ、あまりに両親とコミュニケーションしながらそこまでやって来た結果、彼女はどれが自分自身の気持ちでどれが親の気持ちなのか、自分でも判断がつかなくなっていたのだ。

親が乗り越えるべき壁として立ちばだかつていれば、それとの距離をはかることで自分自身の心理的な特性や傾向などを確認していくこともできる。しかし親と自分との間があまりに平らで地続きのまま育つと、大人になってからも自分を親から独立した存在として自覚できなくなってしまうことがあるのだ。そういう意味では、子どもから「あんたみたいな大人にはなりたくない」「お父さんなんて欠点だらけ」などときらわれることのできる親の方が、「子ども孝行」なのかもしれない。(香山リカ『若者の法則』による)

(注) *不安全感 十分でない、完全でないという気持ち。